

急 告

親愛敬慕する法兄法姉に告ぐ。

本号全部を御一読下さいませ。そして如何なる事件が私並びに団員中におきようとも、一緒に行動して下さいませ。御面倒ですが本部宛に「はがき」一本をお送り下さいませ。御通知のあつた方だけを団員として、五年前に立ち返つて本団の根本的改革をいたします。人に相談することなく、気がねすることなく、自分の信念に立脚して自由に御心をおきめ下さつて、十月十五日までにねがいます。

通知のなかつたお方はどんな情実のあつた方でも退団者と認めます。通知下さるお方は、正団員（団費月二十銭）普通団員（団費月十銭）のいづれにおなり下さるか明らかに書いて下さい。もし書いてない時は普通団員と認めます。

- 通知の様式は、はがきに
- 一、光明団に残ります。
  - 二、正団員（又は普通団員）
  - 三、住所、何県 何市（郡） 何町（村） 何番地
  - 四、姓名、何 某
- の如く簡単に願います。

従来団員の大部分が団費の滞納者でありました。本団の維持上、新しく御通知の方は全部団費を前納下さいませ。団費の計算は居残りの方全部にそれぞれ通知いたします。

全てに行きづまつた私たちは絶望を感じました。けれども再び曙光を認めることが出来ました。東都の大地震のような大破壊の惨状の中に、漸く一縷の光を認めた私たちは、五年前に立ちかえつて、無言の一路を猛進いたします。そんな事情で、出版法の雑誌を新聞紙にする、又出版法になおす、本部の位置が定まらぬ等の事情のために全てが迷つて、本号も亦皆様の手に早く入らなかつたことを許して下さい。一体は本号にあつた原稿は外に出来ていましたけれど、急に全部を変えたのでございます。全てを御推察下さいませ。

法難に出会つて苦しまなければならなかつた私は、あわただしい中に一月二月を送りました。その間に様々な事実を味わつて来ました。念仏している私も、もとより醜い汚い久遠の業苦に悲泣する一泥凡夫にすぎないのでございます。近頃になつて、私の上に社会が見ていた美しい色彩がなくなつて、そこに、ただ素裸の泥凡夫が念仏を称えているのを見た時、熱しやすくさめ易い人心は、私を棄てて去つて行きました。それが人の心の当然であつて、不平も恨みもございません。私はただ泣いているのみでございます。そうしていよいよ深い世界を覗かせて頂きました。

私は、容赦なく「瓜田に杵を入れ、李下に冠を正しました。」「瓜を取つた」と言われても「李をもちだ」と言われても、申し開きも出来なければ、又しようとも存じません。

私には、現在妻帯問題がございます。結婚に対する私の考えは、又、時を得て発表したいと思えます。私の結婚問題に関連して種々なる困難な事柄がおこつて来ました。様々な性格の人を中心に、奇なる、変化に富める事件は起こすまいとしても、ふせぐことの出来ぬ、業そのものの根強いもつれが現れて来たのでございます。

それと合して種々なる小問題の続発のために、私、ひいて光明団は全く四面楚歌の悲運にあつてしまいました。

人は去つて行きます。たった一人取り残された私は「絶望！」と叫ばざるを得ませんでした。けれどもその次には、もう私の行かねばならぬ道がはつきり見えて来ました。たった一人になるまで、死ぬる人をたずねて、業に泣く人をたずねて行かねばなりません。

各地でこの様子を知つて下さらない方にすみませぬから申し上げておきます。

私たちは清さで手をとる賢善精進の人ではありません。業に泣く涙にやつれた者が如来の慈悲に結ばれていくのです。清く平和に歩んでいる時はさておいて、業に苦しむ時、捨ててはならぬ時なのではありませんまいか。

ここに本団の根本改革をするために、本団に残つて下さるお方だけ、御通知をねがうことにした次第です。どうか本号の全部を御一読下さつて御通知下さいませ。

宿業に泣く 涙をたづねて 今から出発いたしましょう

甲「去つて下さい。去つて下さい。法兄も去つて下さい。」

乙「それはあんまり淋しいお言葉ではありませんか。なんで去つて行かれましよう。」

甲「私は私の今の淋しさをもつと泣きたいのです、たった一人泣きたいのです。」

乙「先生はどうかしています。もつと気を静めて下さい。お体にさわります。」

甲「私は今日もたった一人、あの険しい峠を通つて来るのに、泣けてく／＼仕方がないので。家が見えます。寺も学校も見えます。二ヶ月前の私の心が思い出されて、幾度も泣きました。高いところから人の住む里を見ているといつそう淋しさが増して来ます。ついに私はたった一人なのです。すべてにせつばつまった私の魂のどん底から『ひとりだ！』と泣かずにはいられないのです。」

乙『たった一人だ！そこに本当の道が生れる』と常に言つて下さるではありませんか。」

甲「そう言っています。けれども、言葉でなし文字でなしに、『たった一人だ』と真に味わうことは耐えられないことなのです。」

私は町の裏の貧民窟に行つて見ました。乞食になろうと思つて。でも私は托鉢とか供養とかそんな尊い考えからではなくて、この一人ぼっちの孤独の運命を共に泣いてくれる人が、そんな人の中にありはせぬかと思つたからです。恥しいことです。

「悪魔だ」と人から言われます。そうです。私の心の奥底は悪魔なのです。その悪魔をどうしようと思つたつて私にはどうも出来ないのです。でも私は、もうそれに堪

えられないのです。いつそ悪魔は悪魔の道に行こうかとも思いました。思うさま荒れて、人の生血をすすって、人の運命を傷つけて、そうしなければ、世の中はあまりに渡るに苦しいところなのです。」

乙「『極重悪人だ、地獄行きだ』と言つても、世の人には本当は知れていないのです。」

甲「そうです。『極重悪人だ。地獄行きだ』と言つても、世の人には本当はわかつていないのです。地獄行きに何で人の善悪が言つていられる暇がありましようぞ。私 はあまりに淋しいのです。世の中に地獄行きは私たった一人なのですから。」

乙「私も地獄行きなのです。」

甲「信仰を持ったという人が一応は『地獄行きだ』と言います。けれども本当はそうではないのです。皆、善人で賢い人たちだけなのです。」

乙「私も淋しいと思います。皆、賢善精進の人ばかりなのですから。」

甲「『悪人だ、極重悪人だ』とは言いつつも、『やっぱり清らかさが助けられるのだ』と思つていきます。」

乙「なぜこんなに思い切つて言いなさるのですか。」

甲「近頃まではそうまで思つてはいなかつたのです。けれどもこうした、木の葉がはらはら落ちるように、せつぱつまつた逆縁、逆境に出会つた時、私の人格を云々しては逃げて行きます。」

乙「私たちはそうして、一切の諸仏、菩薩に棄てられたのです。手を切られて一人、地獄に行かねばならぬのです。」

甲「泥凡夫が泥凡夫だと泣いているその涙にはふれないで、泥凡夫に美しい色彩をほどこして拜もうとする人ばかりです。描き出した美しい虹が消えて、自性の凡夫がすすり泣いているのを見た時、砂をかけて去つて行きます。」

乙「どうして、無情の人たちばかりの世でしょうか。」

甲「いいえ、人の無情ではなくて、私の業の悲しさです。誰を恨むことも出来ぬのです。淋しいく地上に生れた者の運命なのです。」

乙「もつと業について言つて下さい。」

甲「先日、私は大聖釈迦劇を寿座に見ました。王舎城の悲劇が出ていました。阿闍世太子は、父王頻婆娑羅を深宮に幽閉し、自分が王位につきました。あの度々聞きなされる通りです。太子が父を殺し、母、韋提希を七重の牢に入れたという怨憎会苦、それは実に王舎城におこらねばならぬ事実だったので。頻婆娑羅王には子供がなかつた。ある占者は、『大王の王子は今仙人である。その仙人が生れ變つて王子と生れて来る』と教えました。大王は雨行大臣に命じてその仙人を山中に探ねて、惨たらしく殺してしまいました。その時、仙人は『自分の命はまだ三年あるはずだ。それを今ここで殺すとは。我は太子と生れ變わり、この恨みを晴してくれよう。』と恨みをのんで死んでゆきました。三年たてば太子として生れて来るものを。王のこの仙人殺害は、やがて生れ變つた現在の我が愛子のために殺されたのです。殺さるべき運命、殺さねばやめられぬ業縁、二つのそれは一つの悲しい事実となつてあらわれます。業なのです。久遠劫来の業が、今の極重悪人たる私を生んでいるのです。」

乙「私のたった一人の業が、今のたった一人の私の全体なのですな。」

甲「今の私は、私の業の見苦しさを泣かすにはいられませぬ。」

乙「本当に業のおそろしさに泣いたことのない暇のある人たちは、業に泣くばかりでは足りないと申します。」

甲「私も出来ることならこの業が清められたらと思います。けれども久遠の業苦に悲泣することより外に私には一歩も出られないのです。しよせん、私は極重悪人なのです。地獄ゆきなのです。」

乙「私もそれなのです。そうしてすべての隣人もそれではないのでしょうか。」

甲「すべての隣人もそれだと思いましたが。そこに、本当の人間愛が生れるのだと思います。『おい兄弟、私は私の深い根強い業に泣くよ。お前も泣いているのか。お互に苦しいなあ』と私は法兄の業の上に涙をそそぎ、私の業の醜さの上に、もつと断えざる涙がほしかつたのです。」

乙「先生の業に泣く涙は、万人の胸に湧かねばならぬ涙ではありませんまいか。

涙のおとうさまよ。

涙！ 涙！ ただ涙！

拝みたい心で一ぱいになる。

さみしい涙、悲しい涙、

それはやがて人間の誰もが持つ総一の涙でございましょう。

その全一の涙、総一の涙、

おお、そのみが

おそろしい業におののく、さみしい涙を尋ねて、

次から次へ、

胸から胸へ……………」

甲「万人の胸に湧かねばならぬ涙。おおそうだ。けれども、人々は業から生れた今の悲しい生活に愚痴の涙を流し、苦しきの涙を流しても、もつともつと深く、今の私を生んだすべてのほどき得ぬ業の根強さには泣かないのです。そこに私が淋しさに泣かねばならぬ絶えざる涙があるのです。」

乙「誰も、私たちと泣く人はないのでしょうか。それではあまりに……、誰も皆、清い人ばかりなのか。いいえ清いと見せたい人ばかりなのか……、いいえ、内に目の向かない人ばかりなのか。」

甲「でもたった一人、親鸞様のみは私と共に泣いて下さる。」

乙「でも、あの人たちは申します。『親鸞様は高い高い人格の人なのだ、高い人格の方が極重悪人と泣いたらばこそ、親鸞様は尊いのだ』と申します。」

甲「それは私などと比べたら天地のようにちがった大人格です。けれども何という淋しい見方でしょう。人格という言葉でもが、もつと深く考えねばならぬ言葉のような気がします。仏の前に、仏の前に出た時、誰の人格が高いのでしょうか。」

吉水の教団が散り散りになった時、友の誰かが殺されたり、散つたり、自分は越後に流されて、日本海の淋しい大自然の前に淋しい業を見つめて、愚禿と泣いた親鸞様のお涙が、暇のある言葉で言いあらわされたでしょうか。

「叛逆息子の善鸞様を持つて、勘当せねばならなかった家庭苦に泣いた親鸞様の涙が、高いところにとまった者がおりて来て、虚偽に泣いた涙でしようか。」

「念仏しながらも、真実の心のないことに泣き、自分の魂をとりまく煩惱の根強さを、とりもちにたとえて泣き、見るもの聞くものに囚われる心を猿猴のようだと、自力向上の絶望に泣いて、その上に投げかけられてあつた大悲のみに、この恐しい機をまかせきつた聖人様に、業に泣くだけでは物足りないとか、実際は高いがわざと下りたのだ等、そんな暇があつたでしょうか。ああ。」

乙「人間には悪人だと、業に泣くことのみが本当のような気がします。」

甲「業に泣いて、その次の世界に歩んで出られると予想おもしたり、それだけで物足りないと考える人などは、私と共に泣いては下さらない方なのです。」

「ただ私だけは、泣かずにはいられぬのです。そして泣いて次がどうにもならないのです。否、泣く涙さえ続かぬあさましい奴なのです。」

乙「地獄行きです。地獄ゆきです。」

甲「地獄行きということが私のありたけです。地獄行きだということが、ああ……私の全体で、これから一步も出られないのだ。おお、一言の弁解もいらす、申し開きも出来ない、極重悪人の地獄行き……何というはつきりとした事実だろうぞ。」

乙「魂の実感なしに、口の先だけ地獄行きで、み仏をいじつて極楽参りを求める暇人の胸に、何で業の深さの上に泣き得る人間相愛の涙が湧こうぞ。」

甲「地上如何なる人をも、一人でも棄てたくない。どんな人のどんな生活も、私の泣かねばならぬ同じ業が作っているのだから。」

乙「でも、本当に内なる深さが徹しない人たちが、皆、棄てて行つても。」

甲「たつた一人取り残されても、それは人を恨んではならないのだ。業の淋しさだから、ただ、淋しい〜。」

乙「人類の一人をでも愛しようとした人は、皆、そのように泣かねばならなかったのです。」

甲「聖親鸞も失望したのだ。そうして急いで往生成仏したならば、六道四生の内をへめぐりて、思うままに人を救い得ることに蘇すえたのだ。」

乙「地上に許された愛とは。」

甲「ただ隣人の業苦の上に涙をそそいであげることだけだ。」

乙「そうした涙は人類には失われたのか。何という涙の枯れた、沙漠のような人間界よ。」

甲「けれど絶望してはならない。法兄の目には涙が宿とどまっているではないか。沙漠のような地上にも、時々泉が湧いて、オアシスと呼ばれてあるではないか。」

乙「聖親鸞は尊いオアシスであつた。」

甲「人の涙が枯れたことを歎く前に、自分の魂に涙の枯れていることを悲しまねばならぬ。私は悲しい思いがする。」

乙「人はその様に泣かないで、万人が万人淋しい裁きの世界に住んでいる。」

甲「如何なる罪惡深重の人間でも人の善惡の裁きをつける。善惡の裁きをつけられない人は一人もなく、裁きをつけぬ人も一人もない。裁き、裁かれるのが地上の運命なのだ。そしてそれが生血のすすり合いなのだ。」

乙「人間と人間とが離れて行かねばならぬのは、そうした、地上の悲しい、せねばならぬ約束があるためではありませんまいか。」

甲「永久になくなることのない約束でしょうね。淋しい地上です。人と人とが善惡の裁きをつけては去って行く。」

乙「この地上の絶望的な約束を突出することは出来ないでしょうか。許すことがこの淋しさから離れる道ではありませんまいか。」

甲「お互いに許しあうこと、それは善惡の世界から一步超越とびこえることでしよう。親は子供の惡を見た時、一度は叱ります。そうして善の世界に移らせようとします。けれども、親は心の内から子供を棄て得ないで、魂のどん底に許しています。親と子は善惡の世界にいなながらも、許しあうことによつて魂と魂を一体にしています。

けれども許しあうことは、安く出来ることではありません。苦しんだ後にあることです。人に魂を傷つけられた時、じつとたえて忍び許すことは、苦しい／＼ことで、人間にすべてをなし得る力はありません。

昔の聖者のみよく「恕」の道を歩みました。けれども許すことも人間と人間との魂のどん底に食い入った力ではない気がします。安値に許されたとて何にもなりません。そして又、許し得るなど、人間に許されたことでもないでしょう。」

乙「どうしましょう。どうすればいいのでしょうか。」

甲「法兄はさつき私に教えて下さいました。」

高らかに歌つたではありませんか。

涙！ 涙！ ただ涙！

さみしい涙、悲しい涙！

人間の誰もが持つ人間総一の涙！

おそろしい業におののく淋しい涙。

その涙をたづねて、次から次へ、胸から胸へ。

私の行かねばならぬ道は、そして極重惡人に許された道は、人間全体に続いている涙をたづねて、私の涙とつなぐことです。

私は惡人なんです。

極重惡人なんです。

その私という下々の下生の惡人は、私の過去がつくつたのです。

人間に生れて来るずっと前、始めなしのずっと前から、悪い因ばかり播いて来ました。命と命と、傷つけあつて、呪いあつて。他人のものを盗んで。邪淫にふけて。親を殺して。仏身から血を流して。菩薩を殺して。その他、十惡五逆のありたけをして来ました。その過去の總勘定が今の下品下生の私を生んだのです。

そして、その業のもつれは、今の私にはどうすることも出来ぬ力となつて、私を支配します。作る罪は、兎毛羊毛の先ほどの小さいことといえども、この業の力のあら

われでないということはないのです。今の私はただ、私の醜い業に泣くのみでありませぬ。」

乙「お互いが皆、この業に泣かねばなりません。宿業のおそろしきの前に脆いて、やがてその宿業を切つて下さるみ仏の力によみがえらねばなりません。」

甲「どんなおそろしい罪に泣く時も、弥陀大悲の本願を疑つてはなりません。そうしたおそろしい宿業に泣く悪人こそ本願のお目当てですからね。自分を自分で焼く三毒の業火の中から念仏が出て下さいます。全ての人は、業の根強さに泣いていない時、善人らしく見ゆる時は、相手にもします。愛しもします。けれども一度、宿業のおそろしい力があらわれて苦しんでいる時、誰も彼も逃げてゆきます。けれどもどんなに罪に泣く時さえも、離れずして泣きたまうは、ただ大悲のみ親のみでございませぬ。」

乙「お慈悲の世界は何ということでもございませうか。この深い世界に住ませて頂く私たちは、世間普通の人の世界とは全くちがった力と涙を与えられています。」

甲「分にすぎたことをいたしますまい。極重悪人です。ただ、私は泣いてみ仏の胸に微笑まして頂きませう。」

乙「たった一人、宿業に泣いている方が私の本当の兄弟のような気がします。世間の人は、涙なくてもいい時には愛しい、今こそ泣いてあげねばならぬ時、一番棄ててはならぬ時、棄てて去ります。」

甲「去つてくれ！ 去つてくれ！ という私の本当の心の内は、万人の内、一人をでも、どんな罪の人をでも棄てたくないので。罪に泣く淋しい人をこそ『何という根強い業に泣かねばならぬ気の毒な方でしょう。』と、共に泣きながら、やがてそのまを抱きとつて、業を切つて、仏として生れさせて下さる力を、信じさせたいのです。」

乙「多くの人が、一番共に泣かねばならぬ時の先生を棄てて、世間普通の道に行つてしまったことが悲しまれます。」

甲「深い人間の本当の世界と、み親のお慈悲の強さを、はじめて手厳しく味あわせてもらいました。」

何だか嬉しい気になりました。

立たねばなりません。」

乙「立たねばなりません。どんな苦しい世界をも歩いてゆきましょう。」

甲「苦しいのは今からです。清い方や、暇のある方ではなくて、死ぬる人です。業苦に悩む涙の人をたづねて。」

乙「許された方面に法田を開いて、一粒、二粒、有縁をたどつて、収穫に出ようではありませんか。」

甲「宣伝とか、講演とか、極重悪人にはおそろしい気がします。けれどもじつと見ではいられないのです。何にも、おはからいにまかせて、許された所で縁のつながる同胞たちに、業に泣く涙を知ってもらいませう。そうして如来大悲の大きなご恩をお伝えしましょう。」

乙「参りませう。立ちませう。念仏称えて。」

甲「ああ、永劫にかわりたまわざるみ仏、どんな時も、み仏のみ胸に蘇える私たちは、本当に幸であります。

まず、たった二人で新しく立ちましよう。

南の都会には法兄が待っています。

たった一人だと泣いた者に、本当にみ仏を通して、人類愛によって手を結び得る友を、一人でも与えられたことは何という幸でしょうか。

涙をたづねて、宿業のおそろしさに泣く涙をたづねて、

次から次に、

胸から胸に、

今から出発いたしましょう。

宿業をひきちぎって下さるみ仏のお慈悲を知らせに。」